

いろいろ発見 **高砂** さあ、出発だ！

高砂堀川

さいはっけんちず

再発見地図

史跡等石柱 町名由来板 編



凡 例	
 (A)	史跡等石柱
 (1)	町名由来板

■ 史跡等石柱

① 旧朝日町浄水場配水塔〔H25.3 設置〕

この配水塔は、この地にあった朝日町浄水場から高砂町へ給水する目的で、築造された。

水道の給水開始は、大正 13 年（1924）1 月 1 日で、県下でも有数の歴史を誇るものである。

その後、事業の発展に伴う給水量の増加により、浄水場は、昭和 41 年（1966）7 月 8 日に、朝日町浄水場から米田水源地へと移ったが、高砂市水道事業創設の記念として、配水塔が残された。

平成 15 年（2003）3 月に国登録有形文化財に指定された。

概要	高さ	26メートル	直径	6.0メートル
	水深	8.8メートル	容量	200トン
	材質	鋼鉄製	費用	20,304円
	完成	大正 12 年（1923）10 月 25 日		



② 山陽電鉄旧高砂駅跡〔H25.3 設置〕

大正 12 年（1923）8 月 19 日	神戸姫路電気鉄道開業と同時に高砂町駅として設置。
大正 14 年（1925）2 月	高砂町駅を電鉄高砂駅に改称。
昭和 2 年（1927）4 月 1 日	神戸姫路電気鉄道が宇治川電気により合併され、同社の駅となる。
昭和 8 年（1933）6 月 6 日	宇治川電気の鉄道部門が分離・譲渡され、山陽電気鉄道の駅となる。
昭和 23 年（1948）3 月 1 日	急行停車駅となる。（急行は昭和 59 年（1984）設定消滅）
昭和 27 年（1952）12 月 19 日	特急停車駅となる。
昭和 33 年（1958）10 月 24 日	駅舎を西方に約 100m 移設、連絡地下道、追越設備の新設。
平成 3 年（1991）4 月 7 日	電鉄高砂駅を高砂駅に改称。



③ 旧国鉄高砂線の分岐点〔H25.3 設置〕

大正 3 年（1914）播州鉄道として開通した旧国鉄高砂線は、昭和 59 年（1984）その使命を終えた。その後、市民の通勤と憩いのための道路として遊歩道に生まれ変わった。

この三叉路を南へ行くと高砂駅を經由して高砂海水浴場へ。西へ行くと国鉄高砂工場や三菱重工、神戸製鋼、キッコーマン等大企業の立ち並び工業地帯へと通じていた。当時の高砂の繁栄と発展に寄与した高砂線を記憶に留めるため、信号機、転轍機をこの分岐点にモニュメントとして保存した。なお、高砂商工名鑑（1960）には、法華山谷川を渡り、伊保町南部の工業地へ専用線を延伸する計画があったことが示されていた。



④ 高砂公園〔H25.3 設置〕

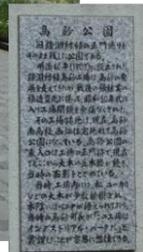
旧鐘淵紡績の正門通りをそのまま残した公園である。

明治 40 年（1907）に設立された鐘淵紡績高砂工場は、高砂の発展を支えてきたが、戦後の繊維業の構造変化に伴って、昭和 50 年代に入り工場閉鎖を余儀なくされた。

その工場跡地は、現在、高砂南高校、西畑住宅地そして高砂公園になっている。

高砂公園の東入口は工場の正門跡で、現在でもここから大木の並木路が続き、当時の面影をとどめている。

当時、工場内には、松、ユーカリなどの大木が多数植樹され、木陰にはベンチが据えられており、当時の高砂町長が「この工場はインダストリアル・パークだ」と賞讃したことが容易に想像できる。



⑤ 申義堂〔H23.12 設置〕

申義堂は、江戸時代（文化年間〔1804―1818〕頃）に、姫路藩の家老河合寸翁の建議によって庶民教育を行うために設立した学問所で、高砂町北本町（現高砂地区コミュニティセンター）に建てられました。申義堂での教育は、朱子学が中心で素読、会読、輪読が行われました。教授陣には、地元高砂の学者である菅野松鴉や美濃部秀芳などがいました。近世学問所の建造物として歴史上価値が高いものです。この建物は姫路藩で唯一残る郷学として庶民教育がなされました。座敷とそれに付属する奥の間と正面縁側という極めて簡素な構成です。正面玄関には飾瓦露盤が葺かれ、小規模ですが学問所として威厳が保たれています。

申義堂の土地・建物は、姫路藩六人衆、高砂の大年寄である岸本吉兵衛が提供しました。建物は、明治維新後廃校となり、明治12年光源寺の説教所として西井ノ口村（現加古川市東神吉町西井ノ口）に移築されました。平成2年に行われた高砂市・加古川市両文化財審議委員会による調査の結果、移築復元すべきとの意向を受け、高砂町に復元をすることとなりました。平成23年に高砂市指定文化財に指定されました。

この移築復元にあたっては、(株)カネカからのご寄付を原資としております。



⑥ 西堀川界隈と寺町〔H25.3 設置〕

北堀川と播磨灘を繋ぐ西堀川がこの地にあった。西堀川の西には北から極楽寺、西福寺、延命寺、十輪寺、薬仙寺が立地し、寺町と呼ばれていた。

この界隈は、かつて小間物町と寺町であったが、江戸時代中期までに小間物町が横町に改称され、明治初期に寺町が横町に編入された。

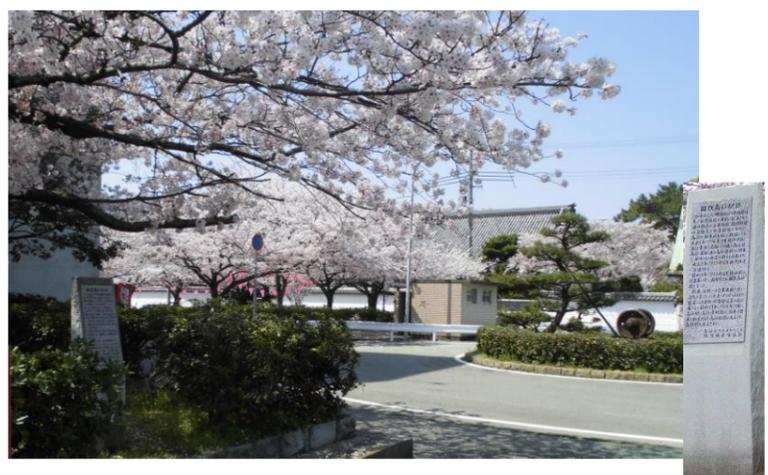


⑦ 国鉄高砂駅跡〔H22.3 設置〕

加古川流域の特産品などの貨物輸送及び旅客輸送を目的に設立された

播州鉄道が、三菱製紙、鐘淵紡績の貨物及び旅客輸送のために高砂と加古川を結ぶ路線として、大正3年（1914年）9月、延伸開通し、白砂青松で名高いこの地に高砂駅、高砂浦駅（後の高砂港駅）が開業し、加古川の舟運が終えんを告げた。大正12年（1923年）12月、播丹鉄道に譲渡された。昭和18年（1943年）6月、造兵廠の設置等に伴い、国有化され、国鉄高砂線となった。

戦後、沿線への企業進出に伴い活気を呈していたが、モータリゼーションの進展による貨物・旅客輸送量の減少等により、昭和59年（1984年）2月に高砂駅―高砂港駅間が、同年11月末に加古川駅―高砂駅間が廃止され、高砂駅も廃止された。



⑧ 高砂商工会議所会館〔H18.9 設置〕

この建物は、旧高砂銀行本店として昭和7年（1932年）に建設された昭和初期の洋風建築物です。

内装の装飾などを含め、建設当時のイメージを今に残す貴重な資産で地域の景観の形成に重要な役割を果たしています。そこで、兵庫県では、景観の形成等に関する条例に基づき、景観形成重要建造物に指定しました。

この貴重な財産を地域の皆さんとともに後世に大切に伝えていきましょう。

平成18年4月
兵庫県知事



① 高砂染ゆかりの地〔H25.3 設置〕

高砂染は江戸時代、姫路藩を代表する特産品の一つとして生産された染物である。その模様は高砂の「相生の松」がモチーフといわれ、松葉や松かさ、尉姥などが二重の型染で表されている。

文献によって江戸時代中期には製作されていたことや、幕府への献上品として用いられていたこと、昭和初期まで販売されていたことなどがわかっている。

慶長の頃、尾崎庄兵衛が創案した「おぼろ染」が世に認められ、後年、高砂の自邸でその業を営み、「高砂染」と改称し、以来相伝え、これを家業として高砂の名産としたと高砂町史に記されている。



② 申義堂跡地〔H23.12 設置〕

申義堂は、江戸時代（文化年間〔1804―1818〕頃）に、姫路藩の家老河合寸翁の建議によって庶民教育を行うために設立した学問所で、高砂町北本町（現高砂地区コミュニティセンター）に建てられました。申義堂での教育は、朱子学が中心で素読、会読、輪読を行い、教授陣には、地元高砂の学者である菅野松鴉や美濃部秀芳などがおり、姫路藩郷学として庶民教育がなされました。

申義堂の土地・建物は、姫路藩六人衆、高砂の大年寄である岸本吉兵衛が提供しました。その後、西井ノ口村にあった建物を、平成2年に行われた高砂市・加古川市両文化財審議委員会による調査の結果、移築復元すべきとの意向を受け、高砂町に復元をすることとなりました。

復元場所は、建築条件等の制約から、江戸時代から形成された寺町で、掘割の遺構が残る十輪寺・薬仙寺前の公園の一角に、復元整備することにしました。

この移築復元にあたっては、(株)カネカからのご寄付を原資としております。



③ 百間蔵跡と津留穀留御番所跡〔H25.3 設置〕

百間蔵は、江戸時代初期、姫路藩主の池田輝政が、京の伏見にあったものを移して増築したと言われている。北にあったものは52間、南のものは48間と記録されている。加古川を下る物資はすべて高砂に運び込まれたため、蔵は姫路藩の倉庫としてばかりではなく、諸藩や旗本の年貢米の集積地として繁栄した。

また、百間蔵のうちの南蔵の南側に津留穀留御番所が建てられた。

姫路藩では、年貢納入以前の米の売買、流通を一切禁止する津留穀留を行っていたため、加古川上流から下って高砂に来る川舟を対象として、米の移出入を監視した。



④ 北堀川界隈〔H24.3 設置〕

江戸時代、高砂は加古川舟運と海運の交易拠点として繁栄した。

碁盤目状の町割りと、まちを取り囲む堀川が特徴的で、このあたりには北堀川があった。

稲荷橋は、北堀川にかかる石橋で、かつては荷物を積んだ高瀬舟がこの辺りを行き交ったことであろう。

堀川沿いには商家や蔵が軒を連ね、百間蔵や番所もあり、物資や人の交流も盛んであった。

この界隈は、港町高砂を想起させる よすが が漂っている。



㊦ 堀川の舟溜り〔H25.3 設置〕

港町として栄えた高砂。慶長5年(1600)に姫路藩主となった池田輝政が港整備を行ったことから、明治中頃まで、物資の集積地として、また舟の寄港地として賑わいを見せていた。

加古川舟運が栄えた当時は、堀川周辺に多くの荷上げ倉庫が立ち並び、舟がぎっしりとつながれた川向こうに、本瓦葺き屋根の蔵が延々と続いていた。

繁栄を極めた高瀬舟も、大正2年(1913)、播州鉄道(国鉄高砂線)の開設によって次々と姿を消した。

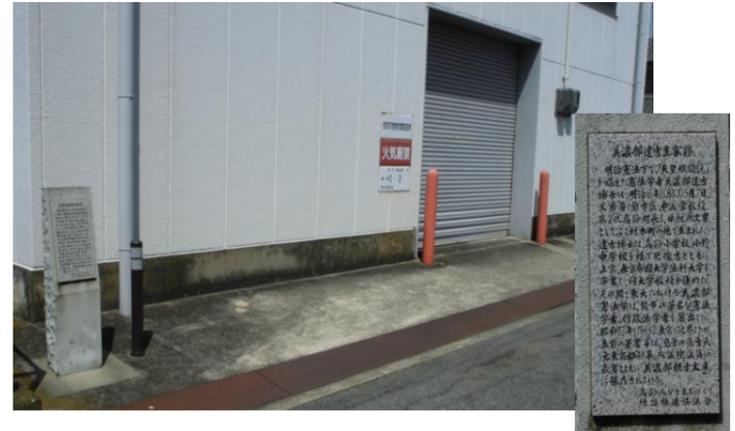


㊧ 美濃部達吉生家跡〔H23.3 設置〕

明治憲法下で、「天皇機関説」を唱えた憲法学者美濃部達吉博士は、明治6年(1873)5月7日、父秀芳(蘭方医、申義堂教授、第2代高砂町長)、母悦の次男として、ここ材木町の地で生まれた。

達吉博士は、高砂小学校、小野中学校を経て兄俊吉とともに上京、東京帝国大学法科大学を卒業し、同大学教授を務めた。その間、東大における美濃部憲法学は、幾多の著名な憲法学者、行政法学者を輩出した。

昭和23年(1948)、東京で他界したが、生前の著書等は、息子の亮吉氏(元東京都知事、参議院議員)の蔵書とともに「美濃部親子文庫」に保存されている。



㊨ 高砂城址〔H25.3 設置〕

高砂城の記録はあまり残っていない。

慶長5年(1600)に池田輝政が播磨に入り、姫路城を築いた後、慶長17年(1612)に播磨の海の守りを固めるために高砂城を築いた。中村主殿助正勝が城主となり、大規模な構えの城を形成させ、高砂は城下町として生まれ変わった。

しかし、その立派な城も元和元年(1615)に出された『一国一城令』により破棄され、短い歴史を終えた。

その後、寛永3年(1626)に本丸の跡地に元来この地にあった高砂神社が戻された。



㊩ 川口御番所跡〔H25.3 設置〕

川口御番所は、高砂の東南角に堅固な石塁の上に建てられていた。

役割は、港湾の警備に加え、出入りする船の積み荷と乗船者を改めることにあり、港湾管理事務所のような業務を行っていた。

鉄砲や大砲などが常備され、定番の武士5人と勤番の武士2人が昼夜交替で勤務していた。番所の前に灯籠台、御船蔵などが設けられていた。

番所は、沖ノ口御番所、御役所とも呼ばれた。



㊪ 高砂向島砲台跡、湛保の祠〔H25.3 設置〕

文久3年(1863)に加古川河口に広がる中州の向島南端に築かれた台場で、大砲が3門据付けられたとされる。高砂向島台場築造以前は下流側に川口御番所、より上流側には常番所(高砂常番所)の2箇所の番所を設けて高砂江の警備にあっていた。

また、文久4年(1864)には台場の西隣に湛保(人造の港)が築造され、祠には港の施設などを築いた三代目工楽松右衛門らの名前が刻まれている。この祠は、西側対岸の南材木町にあったが昭和4年(1929)に移築された。現在も堤防の基段部分に当時の湛保の石垣が残っている。



㊦ 工楽松右衛門（高砂神社）〔H25.3 設置〕

寛保3年（1743）～文化9年（1812）
 高砂は小さな町である この小さな町から「後の世のため」
 に尽くした工楽松右衛門という人物が出た 町の大小は関
 係がない 志があるか その志が広く大きなものであるか
 どうか そして 志を実現するために努力しているかどう
 か それが大切ではないか 幼少の頃から改良や発明が好
 きだった松右衛門は それまでの脆弱な帆布のかわりに播
 州木綿を使った厚地大幅物の帆布の織り上げに成功し「松
 右衛門帆」と呼ばれて全国の帆船に用いられるようになった
 また 松右衛門は幕府の命を受けて千島の択捉島に埠
 頭を築き函館にはドックもつくった
 これらの功により「工夫を楽しむ」という意味の工楽の姓
 を与えられ その後も優れた築港技術者として活躍し 高
 砂港や鞆の浦防波堤などにその足跡をみることができる
 松右衛門の工夫や発明は 松右衛門帆以外に荒巻鮭（新巻
 鮭）石船 砂船 ろくろ船 石釣船などもある
 高砂市教育委員会編纂
 風を編む 海をつなぐ 〈工楽松右衛門物語〉より



㊧ 天竺徳兵衛の墓〔H26.3 設置〕

港町高砂から多くの男たちが世界の海に雄飛していった。
 遠く南蛮に渡って貿易した天竺徳兵衛もその一人で、ここ
 善立寺にその墓が残っている。徳兵衛は、慶長17年
 （1612）に高砂の船頭町に生まれ、15歳のとき、京都の
 角倉与市の船頭前橋清兵衛の書役としてシャム（タイ）に
 わたり、その際貝多羅葉を持ち帰った。その後さらにオラ
 ンダ人の船でも南蛮に渡った。徳兵衛はこの間の体験を見
 聞記にまとめた。元禄8年（1695）没。その後、天竺徳
 兵衛は妖術使いなどになって歌舞伎に登場した。
 四世・鶴屋南北の『天竺徳兵衛韓漸（いこくばなし）』など
 多くの歌舞伎が上演され大当たりをとった。



㊨ 天竺徳兵衛生誕地〔H26.7 設置〕

徳兵衛の父は、池田輝政の知遇をうけ、高砂城の武家屋敷
 の一画に当たる船頭町に住み塩問屋を営んだ。徳兵衛は慶
 長17年（1612）に、この地に生まれた。ここには、近年ま
 で徳兵衛の産湯に使われたと伝えられている古井戸があっ
 た。幼名を徳蔵と言ひ、十輪寺で勉学に励んだ。寛永3年
 （1626）の15歳のとき、豪商角倉与市の朱印船でシャム
 （タイ）に渡り、貝多羅葉を入手し持ち帰った。その後再
 び、オランダ船で天竺（インド）に渡航し貿易をした。前後2
 回に亘る渡海により、彼が記した異国文化を紹介した見聞
 記は、世人の異国趣味を刺激し、歌舞伎になり好評を博し
 高砂の名を高めた。元禄8年（1695）に84歳で死去した。



㊩ 大西唯次〔H28.3 設置〕

発明家・大西唯次は、明治24年（1891）5月6日、加古川
 町寺家町で大西平八郎の三男として誕生。唯次は13歳で
 日本毛織（株）に入社、川西清兵衛社長の社は「一以貫之」の
 精神を学ぶ。大正3年、高砂町北本町の叔父の死によって
 彼の養子となり、時計商を営む。唯次は生来の機械好きで、
 新しいものを創り出す才能は群を抜いていた。大正末期か
 ら昭和初期にかけてヘリコプターの研究を重ね、遂に昭和5
 年、世界で初めてその技術を考案し、特許を取得した。海
 軍・山本五十六の激励もあったが、しかし、我が国におけ
 る用途開発の遅れなどで、無念にもそれが世界を羽ばたく
 ことはなかった。昭和38年（1963）に73歳で没死した。



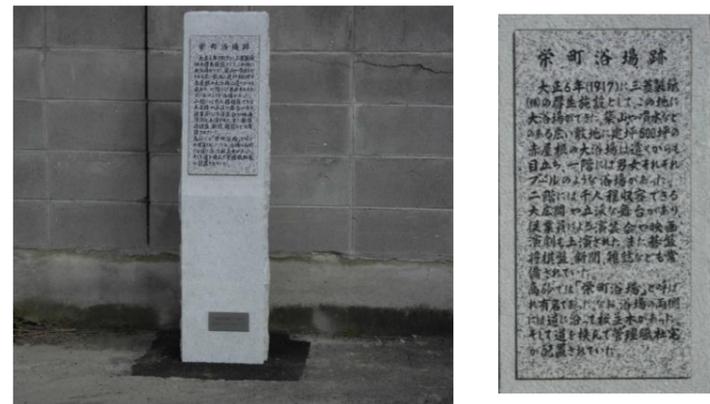
⑤ 河合耆三郎 [H29.3 設置]

河合耆三郎は、新選組隊士・勘定方であった。河合家は富裕な米問屋の蔵元で耆三郎は長男として生まれ育ったが、世の中を変えるためには侍にならなければという高い理想で、新選組に入隊した。実家で培った算盤と書道の腕を見込まれて、勘定方に任命され隊費を任された。池田屋事件にも参戦し褒賞金を貰った。慶応2年2月12日、隊の資金数十両を紛失したとして粛清されたとされるが、真相は明らかではない。享年29歳であった。粛清を知らされた実家では、大変怒り新選組が建てた墓とは別に、壬生寺に立派な墓石を建立した。生家はここ今津町の一角にあった。天保9年(1838)～慶応2年(1866)



⑥ 栄町浴場 [H29.3 設置]

大正6年(1917)に三菱製紙(株)の厚生施設として、この地に大浴場ができた。築山や噴水などのある広い敷地に建坪500坪の赤屋根の大浴場は遠くからも目立ち、一階には男女それぞれプールのような浴場があった。二階には千人程収容できる大広間や立派な舞台があり、従業員による演芸会や映画、演劇も上演された。また碁盤、将棋盤、新聞、雑誌なども常備されていた。高砂では「栄町浴場」と呼ばれ有名であった。なお、浴場の両側には道に沿って桜並木があった。そして道を挟んで管理職社宅が配置されていた。



⑦ 旧高砂樋門跡 [H29.3 設置]

加古川は、全長96km、流域面積1,730km²におよぶ兵庫県最大の川である。その流れは高低差が少ないため普段は緩やかであるが、上流で大雨が降ると一気に増水し川が氾濫することから「暴れ川」と恐れられていた。明治になると水害が多発し、それを解消するために、大正7年(1918)から、昭和8年(1933)にかけて加古川改修工事を行い、その時に河口の高砂堀川の上端に樋門を設けた。大正13年(1924)9月竣工の高砂樋門は、「平時は堀川との連絡を計る舟航に便にし、洪水の際には扉及堰桁を以て洪水の遮断を図り、高砂町をして洪水の患をなくすると共に、堀川への土砂の流入を防ぐ目的」だったという。



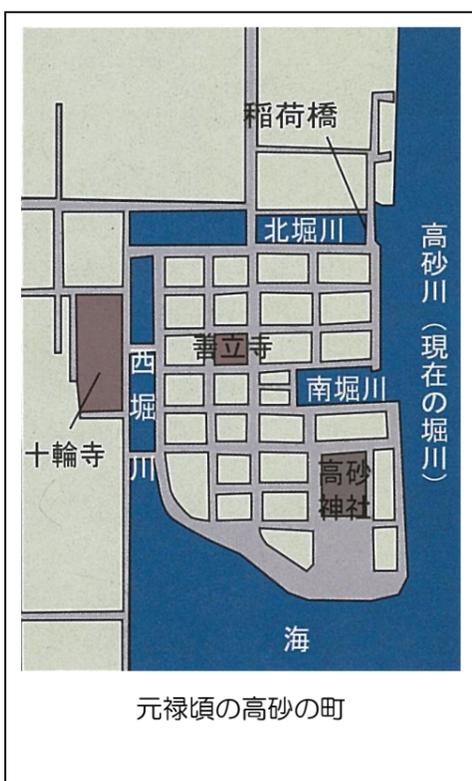
町名由来板

(平成15年3月新調 平成24年9月リニューアル)

<p>① 北本町 設置場所：自治会掲示板</p> <p>高砂町の中央を南北に貫通する幹線道路沿いの町並。 <small>ごようたしおおどしよりきしもときち べい</small> 御用達大年寄岸本吉兵衛がいた。岸本家は代々木綿業を営む豪商で、姫路藩の木綿専売制に深く関与し国産方貸付相談役に任命された。 <small>ぶんか ひめじはんかうかわいすんおう けんぎ</small> 文化年間(1804~18)、姫路藩家老河合寸翁の建議で郷学申義堂が建てられ、土地・建物は岸本家が提供した。 <small>ごうがくしんぎどう</small> 天保10年(1839)の家数82戸・人数358人</p>	<p>② 南本町 設置場所：自治会掲示板</p> <p>高砂町の中央を南北に貫通する幹線道路沿いの町並。 <small>ごようたしおおどしよりか こぎ へい まちどしよりびんごやじゅうべい おおくらもと</small> 御用達大年寄加古義兵衛、町年寄備後屋重兵衛は大蔵元であった。 <small>しんぎどう こばやしごよう</small> 儒学者で申義堂の教授であった小林梧陽の生誕地である。 <small>べいこく こねいそう</small> 米穀備蓄のための固寧倉があった。 <small>げっさいしようにん かいき げっさいあん</small> 現在、当町には月西上人の開基と伝える月西庵(寺)がある。 <small>てんぼう</small> 天保15年(1844)の家数62戸・人数274人</p>
<p>③ 藍屋町 設置場所：屋台倉</p> <p>北堀川の北岸沿いに東西に連なる町並。 町名は藍(紺)屋が集住したことに由来する。 <small>まちおおどしよりすみやきゆうざえもん おおくらもと</small> 町大年寄炭屋 玖左衛門は大蔵元であった。 <small>ひやっけんぐら くらまい</small> 町の東には百間蔵と呼ばれた姫路藩の蔵庫が南北二棟あり、加古川上流から物資を運搬する高瀬舟の検閲のため津留穀留番所が置かれていた。 <small>たかせぶね けんえつ</small> 天保8年(1837)の家数83戸・人数390人</p>	<p>④ 高瀬町 設置場所：松田大神</p> <p>北堀川の南岸沿いに東西に連なる町並。 町名の由来は加古川流域の年貢米や各種の物資を下流に運んだり、上方から高砂湊に搬入した干鰯や日用品などを上流に運ぶ際に活躍した高瀬舟の舟溜りがあったことによる。 <small>たかせぶね ふなだま</small> 現在北堀川は埋め立てられているが、そこに架けられていた稲荷橋が当時の名残りをとどめている。 <small>いなりばし</small> 天保9年(1838)の家数44戸・人数200人</p>
<p>⑤ 清水町 設置場所：いこいの家</p> <p>北堀川から南へ二筋目の道路沿いに、東は東浜町から西は北本町まで東西に連なる町並。 町名は北本町角の清水(井戸)に由来する。 高砂は海浜に近く、清水の湧出する井戸が少なかったもので、町民の飲料水として貴重なものであった。 また、高砂町成立期の移住者の出身地名だとする説もある。 <small>まちどしよりやすだやちようべい おおくらもと</small> 町年寄安田屋長兵衛は大蔵元であった。 <small>てんぼう</small> 天保9年(1838)の家数84戸・人数370人</p>	<p>⑥ 船頭町 設置場所：駐車場掲示板</p> <p>北堀川から南へ三筋目の道路沿いに、東は東浜町から西は北本町まで東西に連なる町並。 町名は船頭が集住したことに由来する。 江戸時代初期に朱印船に乗り、遠く東南アジアに渡航した天竺徳兵衛の生誕地である。 <small>しんやか へい しのべむら</small> また、新屋嘉兵衛は新野辺村の浜に金沢新田を開いた。この功績により金沢の姓を授けられ、町大年寄格になった。 <small>まちおおどしよりかく</small> 天保14年(1843)の家数58戸・人数231人</p>
<p>⑦ 材木町 設置場所：堀川駐車場</p> <p>南堀川の北岸沿いに東西に連なる町並。 町名の由来は加古川上流から運ばれる材木の集散地であったことによる。 <small>ごようたしおおどしよりまつうらちようべい こめやまたえもん おおくらもと</small> 御用達大年寄松浦長兵衛、米屋又右衛門ほか四人の大蔵元がいた。 <small>しんぎどう みうらしようせき みの</small> 儒学者で申義堂の教授であった三浦松石・憲法学者美濃部達吉の父の美濃部秀芳や俳人田中布舟は当町の出身である。 <small>べたつきち みの べしゆうほう たなかふしゅう</small> 天保13年(1842)の家数13戸・人数52人</p>	<p>⑧ 東浜町 設置場所：自治会掲示板</p> <p>北は高瀬町、南は材木町まで南北に連なる町並。 町名の由来は町場の東端で現在の堀川である高砂川沿いに位置したことによる。 船着場があり、問屋の蔵が建並んでいた。 <small>つばやちようざえもん こまものやぎ へい こめやせいべい おおくらもと</small> 壺屋長左衛門・小間物屋儀兵衛・米屋清兵衛は大蔵元で塩座役でもあった。 <small>しおざやく</small> 天保9年(1838)の家数13戸・人数54人</p>
<p>⑨ 今津町 設置場所：自治会掲示板</p> <p>南堀川沿いに東西に連なる町並。 町名の由来は元和年間(1615~24)姫路藩主本多忠政が加藤隼人らに命じて町づくりを行った際、加古川対岸の今津町から移住した者が多かったことによる。南堀川に面した船着場で、問屋の蔵が建並びにぎわった町であった。 <small>きのしたやり へい おおくらもと</small> 木下屋利兵衛ほか3人の大蔵元がいた。儒学者で申義堂や姫路藩校の教授であった菅野真斎・白華親子は当町の出身である。 <small>すがのしんさい はっか</small> 天保12年(1841)の家数13戸・人数46人</p>	<p>⑩ 田町 設置場所：自治会掲示板</p> <p>南堀川から南へ二筋目の道路沿いに連なる町並。 町名の由来は砂浜や高洲であった当地の開発にあたらせるために、加古川対岸の養田・池田・長田村などの農民を移住させて町を形成したことによる。 <small>てんぼう</small> 天保9年(1838)の家数63戸・人数240人</p>

<p>⑪ 獵師町 設置場所：駐車場</p> <p>東は西宮町から西は南本町まで東西に連なる町並。 町名の由来は獵師(漁師)が集住したことによる。 かつて、高砂周辺は御厨庄と呼ばれ供物として朝廷に魚介類を納めていた。 このことから高砂の海岸部は古くからの漁村であったことがわかる。 天保9年(1838)の家数41戸・人数146人</p>	<p>⑫ 西宮町 設置場所：自治会倉庫</p> <p>南北の道路沿いに北は田町から南は戎町まで連なる町並。 町名は高砂神社の西に位置したことに由来する。 古くは松林があり、人家が散在していたところである。 安永2年(1773)の家数63戸・人数239人</p>
<p>⑬ 東宮町 設置場所：屋台倉</p> <p>高砂神社から南へ延びる町並。 町名は高砂神社の東に位置したことに由来する。 当町の出身者に帆布の改良、エトロフ築港などで知られる工楽松右衛門がいた。 当町には、高砂神社、東戎社がある。 また、現東宮町緑地公園には真言宗海宝寺(後の高砂小学校の前身である偕老小学校)があった。 天保9年(1838)の家数65戸・人数281人</p>	<p>⑭ 南浜町 設置場所：私邸</p> <p>町場の南東部、現在の堀川である高砂川河口に位置し今津町から南へ連なる町並。 町名は町場の南の浜であったことに由来する。船着場があり、問屋の蔵が建並びにぎわった町であった。 柴屋七太夫・塩屋次右衛門は幕末頃の高砂町の大年寄であり、大蔵元でもあった。また、儒学者三浦迂斎の生誕地である。川口番所・塩座会所・川方会所・浦高札場があった。 安永2年(1773)の家数34戸・人数155人</p>
<p>⑮ 戎町 設置場所：屋台倉</p> <p>町場の南端に位置し、かつては海沿いで漁師が集住した町である。 町名の由来は高砂町成立期に阿美仁平ら漁師たちによって撰津西宮戎社を勧請して戎社を建立し、漁業の守護神にしたことによる。 釣屋の屋号を持つ家が多かった。 天保10年(1839)の家数150戸・人数608人</p>	<p>⑯ 狩網町 設置場所：自治会掲示板</p> <p>町場の南端に位置し、かつては海沿いで東は南本町から西は南渡海町まで連なる町並。 町名は漁師が集住したことに由来する。 隣接する釣船町や獵師町などと共に漁業の盛んな町であった。 天保9年(1838)の家数52戸・人数182人</p>
<p>⑰ 釣舟町 設置場所：寺院</p> <p>南本町の西に位置し、かつては海沿いで西堀川まで連なる町並。 町名は船持漁師が集住したことに由来する。 そのため網屋、釣屋、狩網など漁業に関連する屋号を持つ人たちが多く住んでいた。 天保8年(1837)の家数79戸・人数325人</p>	<p>⑱ 南渡海町 設置場所：道路敷</p> <p>横町から南へかつての海岸にかけての町並。 町名は渡海船の船持や船乗りが集住したことに由来する。 高砂町成立期には渡海町であったが、江戸時代中期までに南渡海町と北渡海町に分離したものである。 江戸時代に高砂が港町として栄え、瀬戸内はもとより遠隔地まで多くの物資を積んだ大型の渡海船が行き来したことがしのばれる。 天保7年(1836)の家数59戸・人数227人</p>
<p>⑲ 魚町 設置場所：私邸</p> <p>今津町から西へ西堀川までの東西の町並。 町名の由来は瀬戸内からあがる魚介類を売買する魚市場や魚問屋があったことによる。 高砂町成立期には魚店町と西魚町であったが江戸時代中期までに統合されたと思われる。 高砂町の大年寄を務めた糟屋長平がいた。 天保9年(1838)の家数69戸・人数283人</p>	<p>⑳ 横町 設置場所：自治会館</p> <p>高砂町成立期には小間物町と寺町であったが、江戸時代中期までに小間物町が横町に改称され、明治初期に寺町を編入した。 町名は横(東西)に連なる町であったことに由来する。 かつての寺町には十輪寺とその塔頭がある。十輪寺には中世の高砂城主梶原氏・工楽松翁・菅野白華ら高砂ゆかりの人々の墓、善立寺には天竺徳兵衛の墓がある。 天保9年(1838)の家数52戸・人数205人</p>
<p>㉑ 北渡海町 設置場所：駐車場</p> <p>横町から北へ次郎助町まで南北に連なる町並。 町名は南渡海町と同じく多くの渡海船の船持や船乗りが集住したことに由来する。 高砂町成立期には渡海町であったが、江戸時代中期までに北渡海町と南渡海町に分離したものである。 天保7年(1836)の家数45戸・人数140人</p>	<p>㉒ 細工町 設置場所：あじさい公園</p> <p>南堀川から北へ二筋目の道路沿いに北本町から西へ西堀川までの東西の町並。 町名は細工職人が集住したことに由来する。 町内に町会所があり、町役人として高砂町の大年寄と月番町年寄2、3人が詰め、町政事務にあたった。 弘化3年(1846)の家数45戸・人数178人</p>

<p>かじやまち ⑳ 鍛冶屋町 設置場所：緑地</p> <p>南堀川から北へ三筋目の道路沿いに北本町から西へ西堀川までの東西の町並。</p> <p>町名の由来は高砂北西部に開けた農地で用いる農具や船大工の使う釘などが作られていたことによる。</p> <p>まちどしよりさしものやちようべい 町年寄指物屋長兵衛ほか、高砂染を考案した紺屋庄兵衛がいた。</p> <p>まちば 高砂町場の必要物資などを貯蔵しておく郷蔵があった。</p> <p>てんぽう 天保14年（1843）の家数50戸・人数189人</p>	<p>じろすけまち ㉑ 次郎助町 設置場所：光守神社</p> <p>北堀川の南岸沿いに、北本町から西へ西堀川まで東西に連なる町並。</p> <p>ゆうかく かつては遊郭やお茶屋などでにぎわい栄えた花街であった。</p> <p>なかすじゆうえもん きょうどうどう 幕末には中須重右衛門の和塾教童堂があった。</p> <p>てんぽう 天保10年（1839）の家数49戸・人数168人</p>
<p>かぎまち ㉒ 鍵町 設置場所：自治会館</p> <p>かつてあった寺町の西に位置し、南北に連なる町並。</p> <p>町名は高砂神社の秋の祭礼で鍵開けの神事を行うことに由来する。</p> <p>かまや やごう 釜屋の屋号が多く、古くは塩浜に従事する人が集住した町であった。</p> <p>てんぽう 天保13年（1842）の家数47戸・人数180人</p>	<p>だいくまち ㉓ 大工町 設置場所：八幡宮</p> <p>西堀川沿いにかつてあった寺町から南へ南北に連なる町並。</p> <p>とかいせん 町名は漁船や渡海船などを建造する船大工などが集住したことに由来する。</p> <p>まちどしよりだいくやぜんべい 町年寄大工屋善兵衛のほか、組頭が3人おり、大工職人の家が21軒あった。</p> <p>てんぽう 天保9年（1838）の家数39戸・人数173人</p>
<p>ひがしのうにんまち ㉔ 東農人町 設置場所：自治会館</p> <p>町場の北端、北堀川の北岸沿いに北本町から西へ農人町まで連なる町並。</p> <p>町名の由来は西隣の農人町と同じく農民や塩田従事者が多く住んでいたことによる。</p> <p>江戸時代中期に農人町から分れて成立した。</p> <p>まちどしより しおやとうべい 町年寄は塩屋藤兵衛であった。</p> <p>てんぽう 天保12年（1841）の家数34戸・人数130人</p>	<p>のうにんまち ㉕ 農人町 設置場所：道路敷</p> <p>町場の北西端、北堀川の北岸沿いに東農人町から西へ東西に連なる町並。</p> <p>町名は農民や塩田従事者が多く住んでいたことに由来する。</p> <p>おおじょうやなみかく おかだもだゆう 高砂周辺の農村部を統括する大庄屋並格の岡田百太夫がいた。</p> <p>じない こみやち 地内にはもとの高砂神社があり古宮地といわれた。</p> <p>てんぽう 天保12年（1841）の家数103戸・人数480人</p>
<p>みやまえまち ㉖ 宮前町 設置場所：緑道フェンス</p> <p>町名は江戸時代後期に開かれた宮前新田に由来する。</p> <p>ぶんせい いんなんみ おおぐに きし 宮前新田は文政3年（1820）印南郡大国村の木綿商岸本十右衛門が開いたもので八町八反余りあった。昭和11年に宮前新田のほとんどは隣接する工楽新田とともに鐘淵紡績の人絹工場（現カネカ高砂工業所）の敷地になった。町名の制定は昭和27年である。</p>	



慶長5年（1600年）に姫路城主となった池田輝政が高砂の町割り（都市計画）を作り、次の本多忠政の時（元和3年（1617年）～寛永16年（1639年））、現在の高砂の町の基礎が築られました。左の地図は元禄頃（1688～1704年）の景観を描いたと言われる絵図を参考に作成しています。

現在とは異なり、町の周囲を水路が囲んでいて、計画都市「高砂」の輪郭が明瞭でした。高砂堀川地区とは、左記の水路に囲まれていた区域に加えて、かつて町家が建っていた鍵町や藍屋町、寺院群が建ち並んでいた寺町（十輪寺周辺）を含めた地区です。



高砂堀川 再発見地図 史跡等石柱・町名由来板 編



発行 平成29年4月
編集 高砂みなとまちづくり構想推進協議会 編集委員会
(事務局 高砂市まちづくり部まちづくり推進室都市政策課)
〒676-8501 兵庫県高砂市荒井町千鳥1丁目1番1号
Tel 079-443-9033 Fax 079-443-9091